

エッセーと写真で 「田舎日記」第2弾

煩惱の数と同じ108話のエッセーと、108点の写真が一冊に見開きで交互に収められているユニークな本が出版された。タイトルは「田舎日記／一写一心」。文筆と写真をそれぞれ趣味とする行橋市内の男性2人の共著だ。本はどちら側も「表紙」。それぞれ目次が設けられ、写真はページを左へ、エッセーは右へ繰ることと読み進む体裁になっている。

エッセーは行橋市の元教育部長、光畑浩治さん(69)＝同市下稗田＝が、写真は元郵便局長で全日写真会員の木村尚典さん(75)＝同市西宮市4丁目＝が担当した。光畑さんが昨年、書家と共著で出版した「田舎日記・一文一筆」に次ぐシリーズ第2弾になる。

みやこ町出身の木村さんは脳梗塞で倒れ、右手が思うようにならなくなった。師範の資格を持つ書道を断念する一方、リハビリも兼ねて好きだった写真に打ち込むようになった。

「感動したものは何でも撮る」と



それぞれ自分の表紙を向けて本をもつ
光畑さん(左)と木村さん＝行橋市

行橋の男性2人共著、「表紙」もふたつ

いう木村さん。山でも海でも重いカメラと三脚を担ぎ、海外を含めて飛び回った。今年1月には75歳の記念に米国・アラスカに出かけ、零下40度の極寒の中で意願のオーロラ撮影に挑んだ。

その際の写真のほか、撮影のための雑草刈りを含めて10回も通ったという英彦山のミツマタ、来年の「ゆくはしふるさとカレンダー」にも選ばれた「曙のあみ漁」など、この10年間に撮った中でもお気に入りの作品が収められている。

光畑さんのエッセーは、郷土に根ざした思いを基本にしながら、身近な日々の出来事や社会のあらゆる事象について、1話を1千字ほどで書きつづった。「ノーベル賞」「原爆詩人」「巖流島の決闘を検証」「イスラム教とは何か」を読む」「回文ってスゴイ世界だ」など、内容は多彩だ。

木村さんは「光畑さんの優れた文章と共に印刷できて光栄です」。光畑さんは「残せることのありがたさを感じています」と話し、今後俳句や水彩画などのコラボを検討中という。

A5判変型、240ページ、税抜き1800円。問い合わせは花乱社(092・781・7550)。(久恒勇造)